

南方（ビルマ）

ビルマ菊兵团

九死に一生 敵中突破

佐賀県 小笠原 平 吾

私は昭和十八年四月、久留米第四十八連隊留守隊に入隊し、第一期の検閲を終えて、七月末門司港を出帆し、ビルマのラングーンに上陸したのは十月だった。

以来、ビルマ戦線に参加しましたが、今日は、九分九厘まで死んでいたのに故国に生きて帰れました、九死に一生を得た自分自身の強運に感謝しています。

昭和十九年六月五日、フーコン地区ナンヤセイク三又路で、第五中隊（中川隊）が敵の攻撃を激しく受け

た時である。佐世保市在住の吉村伍長と突撃寸前のことである。左半身十三カ所に銃弾を受け、全身が火が付いたような激痛をしていて、出血多量のため意識が朦朧もろろとなり、ついに人事不省に陥ってしまった。それから何時間たったか分からないが、気が付くとあたりは真つ暗闇であった。

一緒にいたはずの吉村伍長の姿が見えない。うつろな目に入って来たのは、トンブソン銃を肩から下げた英軍の歩哨兵である。私はこのとき、軍服の左半分は銃弾で吹きちぎられて裸同然であった。

英軍の歩哨は私を戦死者と思ったのか、何もしなかった。私は英軍の歩哨を見たとき、「俺も未だ生きているのだ」と思い「これから先どうしよう」とぼんやり考え込みながら、息を殺して英軍の立ち去るのをじ

つと待つていた。

歩哨が見えなくなつてから起き上がろうとしたが、全身の傷が痛くて動くことができない。手榴弾を引き出し、最後の覚悟を決めて自決しようと思つた。しかし、こんな所で犬死にしてたまるものかと強く自分に言い聞かせ、壕から這い出したが、英軍がどこにいるのか全然見当がつかない。

翌日になつて再び交戦が始まり、友軍の銃声が右翼の方向から聞こえてきたので、その銃声を頼りに行くとした。しかし、敵に発見されるので昼間はジャングルの中に身を隠して息をひそめていた。夜になつてから五〇メートルほど這つては休み、三〇メートル這つては休みして、途中、竹を杖の代わりにして少しづつ撤退を続けた。

夜中の火事は近くに見えるというが、本当に砲火は近くに感じてても、友軍にはなかなか辿り着くことができなかつた。話し相手になる戦友もおらず孤独である。しかも、食物は何一つなく、首から下げた信管の中に、戦友の遺骨と一緒に入れておいた岩塩を少しずつ舐め

た。

泥水ばかり飲んでいたのでアムーバー赤痢にかかり、テング熱には冒され、傷口からは蛆が入り込んでいる。敵中ではあるし、ただ残っているのは気力のみであつた。死力を尽くしてただ一人敵中をさ迷いながら撤退を続けた。途中、敵兵が負傷者や重傷者を担架に載せて往來するのを、四、五メートル近くで何回となく見た。草むらに身を隠し、その都度、もうこれまでか最後の覚悟を決め、手榴弾の安全弁を口にかけたが、何とか敵兵に見つからずに済んだ。

何日か経つて、ようやくナンヤセイクの伐開路に辿り着くことができた。伐開路といつてもそれは名ばかりのもので、道路とは程遠いものであつた。敵に遮蔽しながら迂回撤退するのだから、見付けるにも通過するにも容易ではなく、まさに辿るという文字そのものであつた。二、三百メートル後方からは敵兵が追尾し、英兵らしい話し声が近くに聞こえてくる。気ばかり焦つてはいても、骨と皮ばかりに痩せ衰えた体では、何らなすべき術はなかつた。

もうこれまでと捨て鉢気分になり、ドカッと腰を下ろすと、フーコン特有の山蛭が、頭上の樹から雨と共にザーザーと音を立てて舞い落ち、体に吸いつき、血がみるみる流れ出し痛くてたまらない。栄養も取つてない体にもこんなに血があるのか、これではますます衰弱してしまふと思いつつも防ぐこともできない。

路傍には私と同様に、栄養失調で行き倒れの戦友たちが群れをなし、腰を泥沼の中に下ろしたまま息絶えた者、死に際の魚のようにパクパクと、思い出したように息だけついている者、しかも所持品はなくなっていた。パンツからは、夏蜜柑のように大きく腫れ上がった鞆丸を露出し、歩けずに四つん這いになっている戦友もいる。また、駄馬の両側に重傷者を縛りつけて行くのを見て、「俺も一緒に乗せてくれ」と叫ぶ者、目の前にいながら何もしてやれない無力さ、何もしてもらえない、たまらなく悲しい思い出であつた。

疲れきつた体に鞭打ち、竹の杖を頼りにして十数日間ほど彷徨い続けた。やつこのことでカミンの渡河点まで辿りついたところ、後方にいたはずの敵軍が早

回りして対岸に陣取っているのは驚くと同時にがっかり、どうやってこれを突破できるかと大きな不安を感じた。

夜中一人筏に乗って、ワイヤーロープで下流の対岸に着くまで、敵の照明弾投下で付近一带は昼間のようになり、明かるくなり、対岸からは敵兵が私を狙って撃つので、筏もろ共、魚の餌食かと半ば諦めていたが、幸運にも対岸に辿り着くことができた。

息つく間もなく断崖を這い上がり、敵中を突破したものの、菊兵团転進路、だれがつけたか知らないが通称「白骨峠」ともいわれる「筑紫峠」へと差しかかった。

しとしと降りしきる雨の中、泥水ばかりすすり続けたため、アメーバ赤痢がひどくなり、また、デング熱に冒され四〇度以上の高熱と闘いながら、左半身負傷の激痛でへとへとになった体を、昼間はジャングルの中にただ一人隠れていても、敵の戦闘機は遠慮会釈も無く頭上すれすれに飛来して、機銃掃射をして立ち去るので抵抗することができず、敵のなすがままで、

全くやり切れない状態であった。

この峠は、ナンヤセイク伐開路以上に死臭が漂う峠であった。峠の頂上では同郷の森田愛次郎氏に出会い、「この峠もあと十六キロだから頑張れよ」と励まされたことも、高熱のため、うつろであった。

道端には数百人の死体が延々と続き、身動きできない戦友たちは、敵の捕虜になるよりはと三人、五人、円座して手榴弾で自決してゆくのを目の前で見た。また、四つん這いになって眠っているのかと思えば、その上に蟻が群がり、既に息絶えている者もいる。また、マラリアの高熱に冒され狂気となり、故郷に残した妻子の名を高々と叫んでいる者、「水をくれ、水を飲ませてくれ」と声をふり絞って叫ぶ者、敵に殺されるより「早く殺してくれ」と縋がりつく者もいる。傷口からこぼれ落ちる蛆虫を払い落とす気力もなく、泥沼の中に座り込んでいる者たち、全くの生き地獄とはこのことかと思われた。

飲まず食わずで疫病と闘い、傷の手当もできず、蛆虫を沸かせながら、ただ気力だけで死の撤退を続け、

敵中を突破して奇跡的に部隊に辿りつき、生還できて夢のようである。

次にビルマ戦線最後の戦闘について述べてみる。

ニヤンカシの戦闘のことである。

昭和二十年三月、メーカーラの作戦で、空陸一体の敵戦車部隊と肉弾戦を挑み、引き続いてシッターン河口まで数百キロに及ぶ長距離の転進に成功したものの、当時の第二十八軍（策集団）総勢三万名がペーグー山系に孤立しており、その救出が最重要課題となっていた。

そのためには敵の大軍を「ニヤンカシ」方向に引き付けることが必要であった。しかしその策集団救出作戦をなし得るのは、満身創痍のビルマ方面軍の中で菊兵团（第十八師団）だけだった。その我が菊兵团各部隊が最後の力を振り絞って参戦したのがシッターン作戦であり、ニヤンカシ攻撃であった。

この作戦がビルマの最後の戦闘であり、その時期は、ビルマでは雨季の最中で、シッターン河は増水し濁流が

渦を巻き、河幅は千五百メートルから二千メートルに
なっていた。

終戦間際の七月三日、日没を待つてシツタン河を渡
河し、夜半十二時を期して歩兵第五十六連隊第五中隊
行動を起こした。

前後左右真つ暗闇の中、身を隠す木もなく、膝まで
没する水田を進んで行くが、どこに敵陣があるか皆目
分らない。ただ見えるのは水平線のように広がって
いる水面のみであった。そのうち突然前方に森が幽か
に見えかけてきた。

中隊長は「生まれ」と号令、成富軍曹を呼び「敵の
攻撃地点を偵察し、突撃の好機を見て信号弾を上げ
ろ」と指示した。分隊が発射して二十分、三十分過ぎ
ても信号弾は上がらない。しばらくして小銃弾の発射
音が単発的に聞こえ始め、次第に激しくなってくる。

中隊長は「成富分隊はもう駄目だ、前進」と命令した。
各小隊は横一線となり敵陣にと迫っていった。突撃
開始は、四日未明四時ごろであったと思う。敵に察知
されぬよう胸まで泥水に浸り、水音も立てず静々と這

うようにして部落入口付近まで辿り着いて見たら、敵
は鉄條網を幾重にも張り巡らせ、石油缶を点々とぶら
下げており、その上堅固なトーチカを構築し、一斉に
射撃を開始してきた。

中川中隊長は手榴弾を投げて「突つ込むぞ」といっ
てバナナの木陰から立ち上がろうとした瞬間、敵弾が
中隊長の胸部を貫通し壮烈な戦死を遂げた。我々五十
名は突撃を敢行する。学友だった橋本見習士官もこの
地で戦死を遂げた。

払暁の薄明かりの中、すかして見渡せば、皆伏せた
まま眠っているように全員息絶えていた。この戦闘で
奇跡的に生き残ったのは私だけだと思っていたら、菊
五十六慰霊祭で、四十六年ぶりでもう一人の生還者は
佐賀の緒方さんだと知ることができた。

第五中隊全滅の地点は、菊兵团巡拜のとき、あちこ
ち捜し求めて歩き、写真に収めることができた。

泣くもんか 心に誓いし ニヤンカシ

戦友の面影 数珠むせぶ

【参 考】

小笠原氏の、当初述べた負傷の現認証明書には次のごとく記されてある。

現 認 証 明 書

本 籍 佐賀県藤津郡鹿島町大字高津原四三六四

現住所 右に同じ

第十八師団歩兵第五十六大隊第五中隊

昭和十七年徴集 陸軍伍長 高 島 平 吾

一、受傷年月日 昭和十九年六月五日

一、受傷場所 北部ビルマ、ミッテイーナ県「ナン

セク」三叉路

一、傷 名 左腋窩部及左上膊軟部盲貫砲弾破片

創兼左腿部及左足背軟部盲貫砲弾破

片創兼左膝関節軟部貫通銃創

一、受傷状況 昭和十九年六月五日十時頃北部「ビ

ルマ」ミッテイーナ」県「メンセク」

三叉路附近敵陣地攻撃中空撃ノ際

迫撃弾及機関銃ニ依リ該部ヲ受傷ス

右現認ス

昭和十九年六月五日

現認者 歩兵第五十六連隊 陸軍中尉 庄島 政六

同 第四中隊 陸軍軍曹 平山 富男

右相違ナキコトヲ証明ス

昭和二十四年六月九日

佐賀県世話課長 ㊟